

〈研究ノート〉

## トーマス・マン『魔の山』の 「古紙回収プラン」に関する一試論\*

### A Note on ‘The Recycling Plan of Old Newspapers’ in “Der Zauberberg”

利 光 強

トーマス・マンの有名な文学作品『魔の山』のなかに「古紙回収プラン」に関するエピソードが描かれている。この箇所について環境経済学的な視点からの解釈を行い、その上で今後の研究課題を指摘する。なお、本稿は研究ノートの段階であり、「古紙回収プラン」を糸口として 19 世紀後半から 20 世紀初頭にかけてのドイツ、そしてヨーロッパにおけるエコロジー思想や資源リサイクル政策に関して（数量）経済史的、および社会思想的な考察を行う準備草稿である。

This short paper is a note on ‘the recycling plan of old newspaper’, which is an episode in “Der Zauberberg” (1924) written by Thomas Mann (1875-1955). The paper is a first approach to ‘the plan’, based on environmental economics. In other words, I present the earlier version to address ecology, environmental problems, and resource recycling policies in Germany and Europe before World War I.

Tsuyoshi Toshimitsu

JEL : Q53, Q57, Z11

Keywords : Thomas Mann, Recycling, Ecology

#### はしがき

2017 年 3 月末をもってご退職される松本有一教授の研究分野はおもに 2 つ

---

\* 本稿の作成にあたり、田村和彦氏（関西学院大学国際学部教授）ならびに原田哲史氏（関西学院大学経済学部教授）から有益なご助言を頂いた。この場を借りてお礼を申し上げます。なお、本稿の瑕疵はすべて筆者に帰すことは言うまでもない。

に分けられる。一つは 20 世紀初頭におけるケンブリッジ学派のなかで異彩を放った P. スラッフア（その代表的な著書は『商品による商品の生産』）を中心とした近代経済学史研究である。そして、もう一つは持続可能な循環型社会やリサイクル問題に関する環境経済研究である。近代経済学史と環境経済（環境とのバランスのとれたマクロ経済成長）の異なる分野での研究は、一見するとつながりが見えにくいかも知れない。ただ、経済学部研究会（2017 年 2 月 22 日開催）でのお話では、学部（大阪市立大学経済学部）1 年生の外書講読の教科書がケインズ『一般理論』であったこと、そして大学院（同上）の授業で、R・G・D アレン『現代経済学—マクロ分析の理論』を読んでいたことなどから、いわゆるケインズ経済学（あるいは、マクロ経済学）を勉強されていた。加えて、80 年代半ばにはすでに興味を持たれていたが、とりわけ 98 年以降、「循環型社会」や「持続可能な発展」など、環境経済に関する研究に取り組まれた。したがって、松本教授のなかでは一貫した研究活動であると理解できる。

個人的なことになるが、松本教授とは大阪市立大学大学院経済学研究科の同窓である。私も大学院生時代の修士課程（博士前期課程）では経済学史や経済史の授業を受けており（当時の大学院における授業では、単位を気にせず、好きな科目を履修していたように思う）、博士後期課程に進学するまでは、マルクス経済学をベースとして国際（政治）経済や経済開発の分野を勉強していた。また、当時（今から 30 年以上前）の大阪市立大学ではマルクス経済学と近代経済学との垣根があまり高くなかった。マルクス経済学から近代経済学に転向した教授もいたし、逆に近代経済学を専門にしていながら、マルクス経済学に共感を持っていた教授もいたのではないかと思う。

そうした縁で今回、松本教授の退職記念号に研究ノートを書かせて頂くことになった。大学院生時代に経済学史や経済史（社会経済史、生活史）を多少かじった程度ではあるが、松本教授が専門とされている環境問題に少しでも関わるのではないかと思い、トーマス・マン（1875～1955）の代表作『魔の山』（1924）のエピソードの一つである「古紙回収プラン」を取り上げた<sup>1)</sup>。

1) この作品に出合ったのは、2 度目のカナダ留学中（ブリティッシュ・コロンビア大学、2006 年秋～2007 年春）のことであった。留学の研究テーマの一つが環境問題であった。

## 1. はじめに

いわゆる「経済小説」や「銀行小説」などと呼ばれるエンタテインメント作品を除いて、古典的な詩、物語、戯曲、小説など、様々な文学（文芸）作品のなかで、商取引に関わるものやお金の貸し借りなどを題材にしたもの、あるいは作品中のエピソードとして取りあげられているものは少なくない。また、経済倫理に関するものまでを含めると、イソップ童話のいくつかはそれに分類されるかもしれない。さらには、『聖書』（キリスト教経典）や『タルムード』（ユダヤ教経典）をゲーム理論的に考察している研究もある（たとえば、ブルムス（2006））。近年では、グローバル化により先進諸国内の格差が進行している状況を歴史的なデータを利用して分析しているトマ・ピケティの『21世紀の資本』においても、19世紀フランスにおける格差社会を描いたバルザックの『ゴリオ爺さん』が取りあげられている。

このように、文学作品が経済や金融の問題を扱っていることは珍しいものではない。なぜなら、文学作品で描かれているものは、人間そのもの、あるいは人間社会であるとするならば、まさに経済や金融は、様々な人間の意思決定や行動など、まさに人間社会そのものが露わになっているからであろう。したがって、こうした文学作品の経済や金融の問題に関する研究も少なからずある。たとえば、シェークスピアの『ヴェニスの商人』を題材として、「資本論」解釈、あるいは「資本主義」分析を行った岩井（1991）のエッセイがあげられるだろう。

さて、文学作品に取り上げられる経済や金融の問題に加えて、近年では、エコロジーや資源リサイクルなどを取りあげた作品を研究しているものもある。もちろん、カーソンの『沈黙の春』のような化学物質の使用による環境破壊、野生生物への影響を取り上げた作品はあるが、ただし、文学作品に限ってみれば、経済問題をテーマとした、あるいはエピソードにあげている作品に比べて、環境問題や資源リサイクル政策を描いている作品に関する研究はあまり多くとは言えない（たとえば、石（2011）<sup>2)</sup>）。

2) 宮沢賢治の作品も環境やエコロジーに関連するもの（いわゆる「環境文学」）と言える。ただし、本稿で扱う文学作品として、環境経済（資源リサイクル）政策に関連するものに限定している。

ところで、環境問題をテーマとしていた留学期間中に読んだトーマス・マン (Thomas Mann, 1875-1955) の『魔の山 (Der Zauberberg)』のなかに、資源リサイクルに関する「古紙回収プラン」のエピソードを見つけ、作品の時代背景が第一次世界大戦前のドイツ、ヨーロッパであることを思い、「古紙回収プラン」を糸口に当時のヨーロッパの社会的・経済的状况と重ねあわせ、環境保護に関する政策、環境や自然への考え方、あるいはエコロジー思想について研究することができるのではないかという思いに至った。ただし、本稿はその研究の第一歩であり、より専門的な考察のための準備作業の一部である。

トーマス・マン研究に関して、手に入れやすい、そして専門外の者にもわかりやすい参考となる文献としては、たとえば、村田 (1991)、小塩 (1992)、辻 (1994) などがある。もちろん邦訳でもこれら以外にトーマス・マン自身のことや、様々な作品 (小説・評論・講演、等) などを研究した文献は多い。さらに、ドイツ語をはじめとして、外国語の専門的な研究論文は数限りない。なお、トーマス・マンと、とりわけ彼の作品のうちの『魔の山』について、詳細な評論として、田村 (2002) や友田 (2004) があげられる。ただし、この作品の主旋律から外れるエピソードであるためかもしれないが、両者とも本稿で扱うエピソードについては触れられていない。

本稿では、先にも述べたように、第一次世界大戦前の中欧 (ドイツ、オーストリア、スイス) という時代的・地理的背景の中で、『魔の山』において描かれている、資源リサイクルに関する「古紙回収プラン」というトピックに絞って論を進めていく。したがって、作品についてのより専門的な評論やトーマス・マンの思想などを詳細に考察するものではないことをあらかじめ断っておきたい。

とはいえ、関連する文献を頼りに、若干ではあるが、『魔の山』の内容について触れておきたい。トーマス・マンの『魔の山』は 1924 年に出版された。その執筆のきっかけは、1912 年にカーチャ夫人が病気になり、スイスのダボスにある療養所に入所するのに付き添って約 3 週間を過ごしたことにある。そこでの見聞をもとに短編小説の一挿話として計画したが、第一次世界大戦により、途中、執筆の中断があり、12 年にも及ぶ執筆期間となる長編小説として

『魔の山』は完成されたのである<sup>3)</sup>。小塩（1992、p.161）は『魔の山』を「20世紀前半のヨーロッパ思想のありとあらゆる問題をぶちこんだ魔的試験管（国際結核サナトリウム「ベルクホーフ」）の中での現代的教養小説」と位置付けている。すなわち、結核療養ための高級保養地リゾート地であるスイスのダボスにおけるベル・エポックの繁栄に酔いしれる第一次世界大戦前のヨーロッパの精神的混迷の風刺的な鳥瞰図を描いたサナトリウム小説としてとらえることもできるのではないだろうか。

## 2. 『魔の山』からの引用－「古紙回収プラン」について－

そもそも「単純な性格を持つ一人の市民階級の息子」である主人公の青年、ハンス・カストルプは、ハンブルクから療養中の従兄弟の見舞いに三週間の予定でダボス・ブラッツにある国際サナトリウム「ベルクホーフ」を訪れたが、自分自身も結核に罹っていることがわかり、結局7年もそこで療養することになる。その療養所における様々な人間（所長、看護婦、療養者、など。彼らはまた、様々な人種、民族、そして国籍からなる）と付き合っていくなかで、主人公のハンス・カストルプが成長していく過程が、『魔の山』では描かれている。小塩（1992、p.161）によれば、「単純な主人公の一青年をしてスイス山中ダボス高原の結核サナトリウムという一種の魔法の山の中に閉じ込め、試験管のような山中で主人公の魂の旅を、肉体の病気を通して実験して見せた。」

3) その間にも、いくつかの作品を出版しているが、なかでも1918年に『非政治的人間の考察』（以下、『考察』）を出版しており、このことは、トーマス・マンのドイツ的な精神と生の思想を考察するうえで重要なポイントと言えるが、本稿の考察の範囲を超えるので、これ以上言及しない。ただ、辻（1994、pp.186-188）によれば、「〈精神－生〉の図式のなかで、生の側から、精神に近づき、この精神と生との距離を乗り越えようとする試み」が大きな魅力的な主題となったと述べている。そして、その主題が『魔の山』のなかでは、「単純な性格を持つ一人の市民階級の息子（主人公の青年、ハンス・カストルプ）が、死と病気と退廃の閉じ込められた非日常的な抽象空間に似たスイスのダボスにあるサナトリウムのなかで、様々な人々、とくにフランス的・ドイツ的・地中海的文明とドイツ的神秘主義的精神を代表する人物たちとの弁証法的な論争と夢幻的な恋愛を経験しながら、様々な教養的な体験を積み、生の内容を深めつつ、再び市民生活へ戻ってくるという…生概念が全体に組み込まれて膨大な作品へと膨らんでいくことになるのである。」なお、『考察』出版後、二つの講演、『ゲーテとトルストイ』（1921年）、そして『ドイツ共和国について』（1922年）があり、その後に『魔の山』が完結される。

そして、小説の最終章である第 7 章「巨大な鈍感」において、本稿のテーマである「古紙回収プラン」に関するエピソードが書かれている。その始まりは次のように書かれている。

「ハンス・カストルプは、その善良な性格を見込まれサナトリウムの同宿人（療養者）連中にとって絶好の話し相手に選ばれていた。そうした連中の一人の、オーストリアの一地方の出身で、前身は彫刻家で、口ひげは白く、鉤鼻で、眼は青く、もうかなりの年になる男がいた<sup>4)</sup>。その彼はある経済政策的なプランを立てていた。そのプランはきれいな字で書類に認め、重要な部分をセピア色の絵具でアンダーラインをしていた。」

以下に、そのプランの内容（トーマス・マン著（高橋義孝訳）『魔の山—下—』（新潮文庫、1996 年）496 頁から 497 頁）をいくつかの箇所に分けて引用する。なお、翻訳では漢数字であるものの一部を本稿では算用数字にしている。

- ① 新聞の購読者全部に、古新聞を一日 40 グラムずつ貯めさせて、それを毎月のはじめに納付させるというのである。すると古新聞は、一年にすると約 1 万 4 千グラム、20 年間には 288 キログラムを下らぬ量となる。
- ② キロあたり 20 ペニヒとすれば、57 マルク 60 ペニヒの額になるのだそうである。新聞購読者数を 500 万人とすれば、20 年間に貯まる古新聞の値段は 2 億 8 千 8 百万マルクと言う巨額に達する。
- ③ そのうちの三分の二を新規の購読料に繰り入れれば、新聞はそれだけ安くなる勘定であるし、残りの三分の一、約 1 億マルクは大衆結核療養所

---

4) 原田氏の解釈によれば、「構想を語る老人はオーストリア人なので、オーストリアの通貨クローネで語られてもいいはずであるが、プランではドイツの通貨マルクで表現・計算されている。さらに舞台はスイスであるが、その通貨スイス・フランが使われてもいない。したがって、オーストリアの老人の主張は、ドイツ帝国に当てはまるものとして展開されていると考えてよい。」脚注 3 とも関連するが、「オーストリアの老人をしてドイツ人トーマス・マンが自身の思想を、あるいは彼自身の構想を展開したもの、と見なしてよいのではないだろうか。あるいは、当時それを展開していた人物がいて、マンはそれを念頭に置いていたのかもしれない。」

の財源だとか、不遇の英才の教育資金だとか、人道的な目的に使用することができる。

- ④ プランは極めて綿密に練ってあって、古新聞回収所が毎月集めた古新聞の価格を簡単に算出できるセンチメートル物差しや、代金の領収書に使用される穿孔した用紙のサンプルまでが図面で示されていた。
- ⑤ プランはあらゆる面から正当化され、理由づけられていた。無知なひとたちが古新聞をどぶに棄てたり、火に投げたりして、考えなしに濫費し蕩尽するのは、祖国の森林や国民経済に対する重大なる裏切りの一種だ。
- ⑥ 紙を大切にし、紙を節約するのは、パルプ、木材を大切に節約することになる。またパルプと紙とを製造する際に消費されるすくなからぬ人の資源と資本とを大切にし、節約することになる。
- ⑦ さらに古新聞は包装紙と厚紙との再生させることによって簡単に4倍もの値打ちに変えられるから、これは重要な財源になり、国税や地方税の豊富な財源となり、結局新聞購読者の税負担は軽減されることにもなるだろうというのである。

以上がそのプランの内容であるが、それに引き続き次のようなハンス・カストルプのプランについての感想が述べられている。

「要するにこのプランは見事なものであり、建前としてはどこにも非の打ちどころはなかった。しかしそのプランになんともなく不気味で無用な、いやそれどころか、陰惨なばかげた感じが付きまとっていたのは、この芸術家くずれの老人がある経済的観念に病的にとりつかれていて、そればかりを考えたり主張したりしているのに、内心ではそれをたいして真面目に考えていず、それを実現させようと試みているわけでは全然ないからであった。」

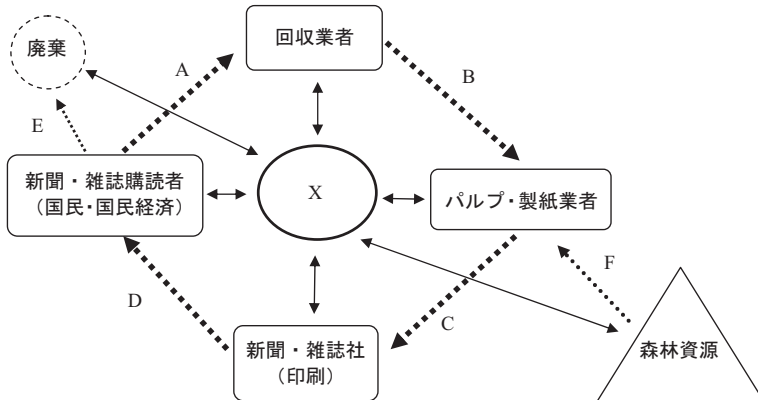
そして、ハンス・カストルプは、このプランをうなずきながら聞いてやったが、しかし思慮のない世間に憤慨してこのプランの発案者に賛成する気にもなれず、かえって軽蔑と嫌悪を感じるのはなぜかと自問自答しながら聞いていたのである。さらにこの後、小説ではベルクホーフの住人の何人かが、エスペラント語を勉強している話が続くのである。

### 3. 「古紙回収プラン」についての一考察

本節では、前節で引用箇所について詳しく見ていく。まず、古紙回収に関わる資源リサイクルは、一般的には図 1 のようにまとめることができるだろう。ところで、引用した個所には新聞購読者を除いて、明示的に、図 1 にあるような古紙回収業者やパルプ・製紙業者、新聞・雑誌社は書かれていない。そこで、ここではあえて、X という存在を仮定して、引用箇所の内容を確かめておこう。

すなわち、X は回収業者に代わって新聞購読者から古紙を回収（あるいは、

図 1 「古紙回収プラン」と資源リサイクルの流れ（概略）\*



\* 引用箇所には雑誌のことは触れていないが、後で触れるように、トーマス・マンは多くの雑誌も購読していることが『日記 1918-1921』に記されている。

なお、A と B は古新聞、C は製紙、そして D は新聞や雑誌の流れを表す。また、E は廃棄される古新聞の流れ、そして F は森林から伐採され、パルプの原料となる木材の流れを表す。



本文そのままに解釈すれば、新聞購読者は X に古新聞を提供し、それをパルプ・製紙業者に卸す。その金額は②に示されているように 20 年間で 2 億 2 千 8 百万マルクになる。すなわち、引用箇所から考えるに、X は図 1 の A と B の過程を代替している。X はその財源を用いて、③にあるように、新聞購読料の引き下げ、結核療養施設の建設や教育資金に充当することができる。さらに、⑥にあるように、森林資源の保護だけでなく、人的資源や（物的）資本の節約にも利用でき、また、古新聞を包装紙や厚紙（段ボール）に再生して付加価値を高め、国税や地方税の財源とすることができる。したがって、プランでは、言い換えると、プランの主体である X からすれば、⑤のようなことは「祖国の森林や国民経済への重大な裏切り行為」となる。したがって、「このプランは見事なものであり、建前としてはどこにも非の打ちどころはなかった」と言えるだろう。

なお、図 1 の C や D に該当する過程に関して、当然、X から供給された古紙と森林資源から伐採された木材を使って、パルプ・製紙業者は製紙を生産し、新聞・雑誌社はその紙に情報（記事など）を印刷して、新聞や雑誌として一般国民に販売する。この過程に該当する箇所の記述は『魔の山』のなかにはない。

さらに詳しく、①と②で記述されている具体的な数字について検討を加えておこう。再度、当該箇所を引用する（下線は筆者）。

- ① 新聞の購読者全部に、古新聞を一日40グラムずつ貯めさせて、それを毎月のはじめに納付させるというのである。すると古新聞は、一年にすると約 14,000 グラム、20 年間には 288 キログラムを下らぬ量となる。
- ② キロあたり20ペニヒとすれば、57マルク60ペニヒの額になるのだそうである。新聞購読者数を500万人とすれば、20 年間に貯まる古新聞の値段は2億2千8百万マルクにと言う巨額に達する。

ここでは、新聞購読者に古新聞を納付（供出）させるプランを設定してい

る。つまり、以前の日本でもよく見られたように、古新聞を「ちり紙交換」業者に、直接、現金やトイレットペーパーなどと交換（売買）するのではなく、現在多くの自治体で見られるように、決まった曜日に古新聞や段ボールなどを自治体からの委託業者が回収するようなシステムに近いプランになっている。したがって、新聞購読者にはその古新聞の代金は入ってこない。さらに、新聞購読者が直接、古紙を指定された場所（機関・組織）に納付（供出）する仕組みになっていることが、④の記述から推測できる。先の考察における X の存在を意味する。

次に、図 1 の B と関係する部分である。すなわち、②では古紙のキロ当たりの単価（1 キロ 20 ペニヒ）が示されている。この単価が、いわゆる古紙市場において成立する価格—すなわち古紙供給者である回収業者と古紙需要者であるパルプ・製紙業者との間の市場取引において成立する価格—であるのか、この記述からでは確かめられない。つまり、当時のドイツあるいはヨーロッパにおいて古紙市場が成立していたのか、それとも、先に述べたように、政府などの公的機関（先の考察では、X）が直接、新聞購読者から古新聞を納付してもらい、あるいは古紙回収業者などの古紙卸問屋からその価格で買い取り、そしてその価格で（あるいは、一定の費用を上乗せして）パルプ・製紙業者に販売していたのか、検討する必要がある。しかし、本稿ではこの古紙価格をとりあえず仮定し、以下の計算を進める。

②にあるように新聞購読者を 500 万人とすると、確かに 20 年間で古新聞の値段は 2 億 8,800 万マルクになる。年間、約 1,440 万マルクである。プランでは新聞購読者数を 500 万人としているが、第一次世界大戦前の 1913 年時点でドイツの人口は約 6,500 万人なので、プランでは人口の 1 割弱を新聞購読者数として仮定していることになる。なお、当時、ラジオやテレビのないヨーロッパにおいて、新聞や雑誌は重要なマス・メディアであったはずである。特に新聞は、政治や経済、そして社会情勢など、日々の情報を獲得する重要な手段であり、また新聞には社説や評論なども掲載されており、文化的な側面も担っていると考えれば、この当時の新聞購読者数がどれほどだったのかを検証することは十分に意味のあることかもしれない。加えて、定期的な新聞購読者の数だ

けでなく、その社会的および経済的な階層（あるいは、階級）の特徴についても分析する必要がある。つまり、労働者階級を含め、広く国民が一般的に購読していたのか、あるいは、トーマス・マンなどの、いわゆる知識人や中高所得者層など、一部の階層が購読していたのか。逆に言えば、新聞自体も対象となる購読者層によって、紙面の内容や量が違っていたのかもしれない。

ところで、当時の新聞購読料については、たとえば、「フランクフルト新聞 (Frankfurter Zeitung)」(トーマス・マンの 1918 年から 1921 年の日記にしばしば取り上げられている新聞) を一例として挙げる<sup>5)</sup> (File 1)。File 1a でわかるように、フランクフルトとマインツにおける新聞購読料 (Vierteljahr 4 分の 1 年、すなわち 3 か月) は 1906 年時点で 7.5 マルク、したがって年間では 30 マルクになる。当時のベルリンの労働者の最低賃金が 1 年間でおよそ 1,920 マルクから 2,040 マルク程度である<sup>6)</sup> ので、年間最低賃金所得との割合としては、1.47%から 1.56%程度である。1913-14 年時点のマルクを現在のユーロで換算すると、1 マルク=4.7 ユーロになる<sup>7)</sup>。したがって、現時点の 1 ユーロ

5) 1919 年に『魔の山』が再執筆され始めてから、トーマス・マンの『日記 1918 - 1921』において、しばしば取り上げられている新聞のおもなものに、「フランクフルト新聞 (Frankfurter Zeitung)」、「ベルリン日報 (Berliner Tageblatt)」、「ミュンヘン最新報知 (Münchener Neueste Nachrichten)」などがあり、雑誌には「南ドイツ月刊誌 (Süddeutsche Monatshefte)」があげられている。それ以外にもたくさんの新聞や雑誌が日記の中で取り上げられている。

『日記』には、第一次世界大戦後のドイツやオーストリアの政治や社会の状況、そして経済問題 (例えば、マルクの記録的な下落) などの報道記事を読んだことが書かれている。さらには、アインシュタインの「相対性理論」の記事を読んでいることも記されている (1920 年 2 月 25 日)。そして、しばしば『日記』に書かれているのは、新聞の文芸欄の批評や論説などをよく読んでいることである。もちろん、トーマス・マン自身も寄稿し、彼の論説が掲載されていることや、他の人の論説なども読んでいることを記している。ラジオやテレビ、さらにはインターネットなどない当時、新聞は雑誌や書籍とともに重要なマス・メディアであり、「ヨーロッパ知識社会 (上山、2001)」において不可欠の存在であったことは明らかである。トーマス・マンが多く新聞や雑誌を購読し、くわえて様々な書籍 (トルストイやドストエフスキー、さらにフランスの作家の作品だけでなく、精神科学や解剖学、医学等々、自らの作品の参考資料となるものなど) も読んでいることが、『日記』に記されている。当然、その古新聞紙や雑誌の処分にも関心はなかったとは言えないと考えられる。

6) 田村教授からの示唆による。なお、これはあくまで概算の一つであり、他の文献によると若干、数字が異なっているものもある。

7) Deutsche Währungsgeschichte (<https://de.wikipedia.org/wiki/Deutsche>) に拠る。

Nr. 235. Erstes Morgenblatt.

Grundbesitzer Zeitung.

Sonntag, 26. August 1906.

Abonnementspreis:
In Frankfurt a. M. 1 Mark 50 Pf.
In den Provinzen 1 Mark 75 Pf.
In den Ausland 2 Mark 25 Pf.

Frankfurter Zeitung
und Handelsblatt.
(Dieses ist von Joseph Baumann.)

Preis der Anzeigen:
Für die erste Zeile 1 Mark 50 Pf.
Für die zweite Zeile 1 Mark 25 Pf.
Für die dritte Zeile 1 Mark 12 Pf.

Fünfundzig Jahre Frankfurter Zeitung.
1856-1906.

Seit fünfzig Jahren hat die Frankfurter Zeitung...
Die Zeitung ist ein wertvolles Institut...
Sie hat die Aufgabe, die Öffentlichkeit zu informieren...

Die Zeitung...
In den letzten Jahren hat die Zeitung...
Sie hat sich an die neuen Anforderungen angepasst...

Die Zeitung...
Die Zeitung ist ein wertvolles Institut...
Sie hat die Aufgabe, die Öffentlichkeit zu informieren...

Die Zeitung...
Die Zeitung ist ein wertvolles Institut...
Sie hat die Aufgabe, die Öffentlichkeit zu informieren...

Ziele und Aufgaben.

Die Zeitung hat die Aufgabe, die Öffentlichkeit zu informieren...
Sie soll die Wahrheit sagen und die Gerechtigkeit fördern...

Feuilleton.

An eine Frankfurterin

Zu dir geh' ich, du meine Tochter...
Du bist die Hoffnung meines Lebens...
Ich will dich glücklich sehen...

Die Zeitung... was ist das wunderbarste Objekt?

Die Zeitung ist das wunderbarste Objekt...
Sie ist das Licht der Welt...
Sie gibt uns die Nachrichten von überall...

Was ist die Zeitung nicht?

Die Zeitung ist nicht...
Sie ist nicht nur ein Blatt Papier...
Sie ist ein Instrument der Wahrheit...

Die Zeitung... was ist das wunderbarste Objekt?

Die Zeitung ist das wunderbarste Objekt...
Sie ist das Licht der Welt...
Sie gibt uns die Nachrichten von überall...

Zeitung und Selbstverleugert.

Die Zeitung und der Selbstverleugert...
Die Zeitung hat die Aufgabe, die Wahrheit zu sagen...
Der Selbstverleugert hat die Aufgabe, die Wahrheit zu verheimlichen...

File 1a (File 1 部分拡大)



出所：同上 [https://de.wikipedia.org/wiki/Frankfurter\\_Zeitung](https://de.wikipedia.org/wiki/Frankfurter_Zeitung) より転載。

＝120 円ほどで換算すると、1 マルク＝564 円となるので年間購読料は 16,920 円になる（なお、1900 年時点で 1 マルク＝6 ユーロと換算されるのでもう少し購読料は高くなる<sup>8)</sup>）。ちなみに、現在の日本における主な新聞の月額購読料は 4,000 円程度なので、年間では 48,000 円となる。日本の平均年収は 400 万円程度なので、購読料の所得に占める割合は 1.2%ほどになり、平均年収ではなくて最低賃金であることを勘案すれば、当時のドイツのそれと大きく変わらないと言えるかもしれない。

さて、プランにおける古紙再生（資源リサイクル）によって生み出された財源の利用方法を改めて整理しておく

- ③ 人道的な目的（例えば、大衆結核療養所の財源、不遇の英才の教育資金、など）
- ⑥ 人的資源と（物的）資本の節約
- ⑦ 国税や地方税の財源

などである。

8) 小塩（1992）では、1 マルク＝1000 円で換算している。なお、1992 年時点ではユーロが導入されていないので、本文で挙げた数値との比較はできない。

こうした様々な政策の財源とする考え方は、第一次世界大戦前という時代背景を考えると、戦費調達的手段になる可能性を否定できないものの、記述通りに受け取るならば、現代の環境保護や資源リサイクリング政策を先取りする考え方と理解できる。そして、脚注 4 にあるように、小説の中でこのプランを話しているのはオーストリアの老人ではあるものの、トーマス・マン自身の構想であると解釈すれば、当時のドイツやヨーロッパにおいてこうした政策（プラン）が生み出され、現代のエコロジーにつながる思想的背景をさらに突っ込んで研究する価値は十分にあると考える。

#### 4. 今後の課題について

はじめにおいて述べたように、本研究の主たる目的は、トーマス・マン『魔の山』の一つのエピソード—すなわち、「古紙回収プラン」に関する記述—を糸口にして第一次世界大戦前におけるドイツ・オーストリア、そしてヨーロッパにおける環境保護、そして資源リサイクル政策に関する社会思想的な問題を考察することである。しかしながら、本稿では、準備段階としてその問題の所在を『魔の山』の中に示しただけである。

さらに、関連する研究課題として次の点があげられるであろう。

- (1) 先にも触れているが、19 世紀後半から 20 世紀初頭にかけてのドイツやヨーロッパにおける古紙市場の（数量）経済史的な分析。
- (2) 最終的には新聞や雑誌、そして書籍などの形で一般国民の手元に届く、さまざまな情報の伝達媒体である紙の生産について、ドイツやヨーロッパにおけるパルプ・製紙業に関する（数量）経済史的な分析。
- (3) ラジオ放送開始にはまだ若干早く、テレビもインターネットもない時代の代表的なマス・メディアが新聞や雑誌など、出版業である。これに関して、経済学的な分析に加え、ドイツやヨーロッパ社会における「新聞・雑誌」のもつ機能と役割についてより広い観点（たとえば、社会学的なアプローチ）からの考察<sup>9)</sup>。

9) たとえば、上山（2001）では、「思想のプロモーター」としての新聞、雑誌、書籍などの出版社

もちろん、上記の3点以外にも、さらに考察を加えるべき課題があることは十分に考えられる。その意味では、当面の課題として上記の3点を位置づけておきたい。

ところで、ここで取り上げている環境問題や資源リサイクル政策という具体的な社会経済的な問題を、19世紀末から20世紀初頭（および、2つの世界大戦を含め）にかけてのヨーロッパの没落という大きな歴史的潮流の中に位置づけ、考察することを忘れてはならない。さらに、第二次世界大戦後70年が過ぎた現在、アメリカの没落（佐伯（2014）では「アメリカニズムの終焉」）の始まりを予想させる様々な出来事（経済格差、資源・環境問題、テロ、移民排斥、右傾化、等）が起こっている。すなわち、本研究の課題を単なる過去のヨーロッパの社会経済問題に関する考察に限定せず、現在の視点から照射することで、逆に、現在、そして将来の世界の在り方を考える指針とすることができるように思う。

#### 参考文献（50音順）

- 石 弘之著『名作のなかの地球環境史』（岩波書店、2011年）  
岩井 克人著『ヴェニス商人の資本論』（ちくま学芸文庫、1991年）  
上山 安敏著『神話と科学 ヨーロッパ知識社会 世紀末～20世紀』（岩波現代文庫、2001年）  
江口 豊著「ドイツ語圏活字メディアの歴史について—新聞を中心に—」『国際広報メディア・観光ジャーナル』（The Journal of International Media, Communication, and Tourism Studies）, No. 17, pp. 3-12, 2013, Hokkaido University Collection of Society and Academic Papers  
小塩 節著『トーマス・マンとドイツの時代』（中公新書、1992年）  
佐伯 啓思著『アメリカニズムの終焉』（中公文庫、2014年）  
田村 和彦著『魔法の山に登る トーマス・マンと身体』（関西学院出版会、2002年）  
辻 国夫著『トーマス・マン』（岩波書店 同時代ライブラリー 171、1994年）

---

(人)と作家(さらには、学者など)との関連性が描かれている。また、ドイツ語圏における活字メディアとしての新聞について考察しているものに、江口(2013)がある。なお、File 1a から、Frankfurter Zeitungがドイツ国内だけでなく、オーストリアはもちろん、近隣のスイス、ベルギー、イタリアでも購読されていることから「ドイツ語圏」の新聞であることがわかる。

友田 和秀著『トーマス・マンと一九二〇年代—『魔の山』とその周辺—』(人文書院、2004 年)

トマ・ピケティ著(山形、他訳)『21 世紀の資本』(みすず書房、2014 年)

スティーブン・J・ブラムス著(川越敏司訳)『旧約聖書のゲーム理論—ゲーム・プレーヤーとしての神—』(東洋経済新報社、2006 年)

トーマス・マン著(高橋義孝訳)『魔の山—上・下—』(新潮文庫、1996 年)

トーマス・マン著(森川俊夫、他共訳)『日記 1918 - 1921』(紀伊國屋書店、2016 年)

村田 經和著『トーマス・マン』(清水書院、1991 年)